

ラトナーカラシャーンティとアランカーラシュリー ——『マハーマーヤー・タントラ』をめぐる諸問題——

大 観 慈 聖

1. 序論 ラトナーカラシャーンティ (= R) とアランカーラシュリー (= A) は、『マハーマーヤー・タントラ』 (= MMT) に対する註釈を著している。R の註釈『有功德』 (= Gu) については Skt. 写本の存在が確認されており ([梵仏研Ⅳ] p.308), 校訂本も [MMT&Gu] として存在するが, A の註釈『大幻と名づける難語釈』 (= Pañ)¹⁾ の Skt. 写本の存在についてはこれまで知られていない。

2. Pañ の梵本 筆者は近年, A の註釈 Pañ の Skt. 写本を発見した。すなわち, 東大写本・松濤目録 No.517 ([松濤] pp.182-183)²⁾ に MMT に対する R の逐語釈 Gu の Skt. 断片³⁾ が含まれて存在することは夙にハルナガ・アイザクソン氏によって指摘されているが ([Isaacson] p.483, note126), 筆者がこの写本を調査した結果⁴⁾, Pañ の Skt. 断片が含まれていることが新たに判明した⁵⁾。筆者によって回収された Pañ の Skt. は, チベット大蔵経の北京版 (= P) において,

(I) P:No.2497, bstan-'gyur, rgyud-'grel, Ḥa, 272a5-273a3 (de ñid ~ phyir ro //)

(II) P:No.2497, bstan-'gyur, rgyud-'grel, Ḥa, 274b5-276b2 (la sogs ~ dbyiñs so //)

(III) P:No.2497, bstan-'gyur, rgyud-'grel, Ḥa, 278b8-281a8 (kha cig ~ par bya'o //)

に三分できるけれども, これは量的に同テキスト全体の約半分に相当する⁶⁾。

3. Gu と Pañ の共通点と相違点 さて, テキスト全体を通じて指摘できる Gu と Pañ の共通点と相違点を整理してみたい。先ず, 共通点として, Gu と Pañ は重要な密教的解釈において共通する記述を多く有していることから, 密教に関しては R と A は同じ伝統を共有していたことが理解される⁷⁾。一方, 相違点として, 唯識の論師である R の註釈 Gu ではその至るところで唯識の理論が詳細に展開されている⁸⁾ のに対して, Pañ にはそのような記述は比較的希薄である。

4. 結論 今回 Pañ の Skt. 写本の存在が断片とはいえかなりの量が回収されたことにより, 原典が知られている Gu に加えて, 非常に難解な MMT の研究にとって重要な原典資料のひとつをわれわれは得たことになる。筆者は Pañ の (I), (II), (III) それぞれについて, その細部にわたる Gu との比較研究を Pañ の校訂テキス

(104) ラトナーカラシャーンティとアランカーラシュリー (大 観)

トとともに用意しているので、順次発表していく予定である。

附論 さて、(II) の部分、特に MMT 第 2 章第 1 節に対する Pañ の註釈箇所に見られる『秘密集会タントラ』(= GST) 第 18 章第 33 偈の引用について付言しておかなければならない。というのも、Pañ 所引の GST 第 18 章第 33 偈、特に cd 句は GST 本来の読みを一新する重要な解釈を示しているからである。GST 第 18 章第 33 偈 cd 句本来の読みは「無自性性が般若であり、方便は自性を特質としている (拙訳)」(Skt.:yo niḥsvabhāvataḥ prajñā upāyo bhāvalakṣaṇaḥ ([Matsunaga] p.115 の脚注 17 の読みを採用) //;Tib.:gañ zīg dños med śes rab ste // thabs ni dños po'i mtshan ñid do //) である ([Matsunaga] p.115)。ところが、これに相当する Pañ 所引の Skt. とその Tib. は「およそ無自性性は般若と方便の関係を特質としている⁹⁾」(Skt.:yā niḥsvabhāvata¹⁰⁾ prajñā-u [pāyabhāvalakṣa] ṇā//¹¹⁾;Tib.:thabs dañ śes rab dños po yi (D:yis) // mtshan ñid rañ bzin med pa gañ //) という注目すべき内容となっている。この場合「般若と方便の関係」(prajñā-upāyabhāva) とは、GST 第 18 章第 33 偈 ab 句の内容を考慮して「般若と方便の〔性的〕結合関係」、すなわち「ヨーガ」を意味し、GST 第 18 章第 33 偈 cd 句の真意は「無自性性」、すなわち「空性」の密教的定義にある。このように、Pañ の引用 (特にその Tib.) は、c 句後半から d 句を prajñā と upāya と bhāvalakṣaṇa の三語を合成した複合語として、prajñā-upāya-bhāvalakṣaṇā という所有複合語 (有財積) に解して「般若と方便の定義」を説明する GST 本来の読みを「無自性性 (= 空性) の密教的定義」を説明する内容に一新している。以上の考察から、GST 第 18 章第 33 偈 cd 句には GST 本来の読みとは別の読み (= 解釈) も存在していた事実を指摘しうる。言うまでもなく、GST 第 18 章第 33 偈 cd 句の Skt. は古典梵語文法を逸脱した破格の文章である (注 10 参照)。

【略号と参考文献】 Bagchi Bagchi, Candra. Prabodh (1935), *Dohākoṣa with Notes and Translations*, University of Calcutta. 梵仏研 IV 塚本他編 (1989) 『梵語仏典の研究 IV 密教經典篇』平楽寺書店。CIHTS:Central Institute of Higher Tibetan Studies.D:sDe dge (Derge) Edition. ed.:edition,edited. GST:GUHYASAMĀJATANTRA (= Skt. ed. [Matsunaga]/D:No.442-443/P:No.81/ 大正 :No.885). Gu:GUṆAVATĪ (= Skt.ed. [MMT&Gu] /D:No.1623/P:No.2495). Isaacson Isaacson, Harunaga (2001), "Ratnākaraśānti's *Hevajrasahajasadyoga*," *Festschrift for Raniero Gnoli*, pp.457-487.Matsunaga Matsunaga, Yukei (1978), *The Guhyasamājatantra*, Toho-shuppan, Osaka. 松濤 松濤誠 廉 (1965) 『東京大学図書館所蔵梵文写本目録』鈴木学術財団。MMT: MAHĀMĀYĀTANTRA (= re-Skt. [MMT&Gu]/D:No.425/P:No.64). MMT&Gu CIHTS

(1992), *Mahāmāyātantram with Guṇavatī by Ratnākaraśānti*, Rare Buddhist Text Series-10, Sarnath. 大観 2005 大観慈聖 (2005) 「『マハーマーヤー・タントラ』の成立に関する一考察—仏教タントラとヒンドゥー神話の関係性をめぐって—」『印度学佛教学研究』54-1, pp.453-450 (pp.100-103). 大観 2007 大観慈聖 (2007) 「『マハーマーヤー・タントラ』所説の諸修法について」『高野山大学密教文化研究所紀要』20, pp.104-67 (pp.59-96). P:Peking Edition. Pañ:MAHĀMĀYĀNĀMAPAÑJIKĀ of Alaṃkāraśrī (= Skt.ed. [大観が準備中]/D:No.1625/P:No.2497). re--restored by CIHTS. Skt.:Sanskrit. 立川 立川武蔵 (1987) 『西藏仏教宗義研究』(第五卷) 東洋文庫. 寺本 寺本婉雅 (1974) 『ターラナータ印度佛教史』国書刊行会. Tib.:Tibetan Version.

- 1) Pañ の Skt. 写本は断片で冒頭部と奥書を欠いているから、作者と書名を Skt. で確認できない。本稿の『大幻と名づける難語釈』というタイトルは訳者不明の Tib. による。Pañ は「難語釈」(Skt.:pañjikā;Tib.:dka 'grel) という註釈の性格上、タントラ本文の難解な特定の用語を抜き出してランダムに註釈しているから、タントラ本文中の各語をつぶさに追って順次註釈が施されている R の逐語釈である「副註」(Skt.:ṭīkā;Tib.: 'grel pa) Gu に比して説明が簡略である。しかしながら、Pañ は Gu と並行する記述を多く有するとともに、Gu と異なった表現を用いて註釈している箇所もあり、MMT の解明にとって意義あるものと考えられる。
- 2) この目録では、I. *Satsukhāvabodhana* (終結部), II. サラハ作の *Dohakoṣa* (Skt. ed. [Bagchi] pp.9-23) の二つのテキストが指摘されている。
- 3) Gu の校訂本 [MMT&Gu] が出版された 1992 年の段階では未知の写本であり、筆者の調査によれば、(a) MMT 第 1 章第 19 偈に対する Gu の註釈箇所の途中、すなわち vijñānam īdṛśam 云々～『入無分別陀羅尼』の引用句の途中、すなわち tasmād bodhisattvo まで ([MMT&Gu] pp.15-16), (b) MMT 第 1 章第 20 偈に対する Gu の註釈箇所の途中、すなわち tatra madhye 云々～MMT 第 1 章第 22 偈に対する Gu の註釈箇所の途中、すなわち ity anena まで ([MMT&Gu] pp.17-19) の Skt. を回収することができた。筆者はこの東大写本の断片を使用した Gu の再校訂本を用意している。
- 4) 本写本の解明を筆者に快く委ねられたハルナガ・アイザクソン氏に感謝したい。
- 5) この写本には、松濤目録に挙げられている二写本 (注 2 参照), Gu と Pañ の断片の他にも未知のテキストの断片が含まれている。量的には 19 フォリオと少なく、いくつかのテキストの断片が混入した不完全な写本であり、貝葉に比較的古い書体で書写されたネパール写本である。各フォリオは順序が著しく混乱し、番号を記した箇所の判読も困難であるために、正確な位置づけができない。今はパドマヴァジュラ作 *Advayavivaraṇaprajñopāyaviniścayasiddhi* 第 3 偈、すなわち yoginas 云々～第 20 偈の直後の文章の途中、すなわち karma śubhā- まで ([CIHTS:Guhyādi-aṣṭasiddhisamgraha, Rare Buddhist Text Series-1, Sarnath, 1987] pp.212-213) に相当する並行句を有する聖提婆作 *Svādhiṣṭhāna (krama) prabheda* (= SA (K) P) 第 15 偈の途中、すなわち samāruhya 云々

(106) ラトナーカラシャーンティとアランカーラシュリー (大 観)

～ 第 58 偈 まで ([CIHTS:*Bauddhalaghugranthasamgraha*, Rare Buddhist Text Series-14, Sarnath, 1997] pp.172-177) の断片の存在を新たに指摘するにとどめ (SA (K) P の同定は西山顕大氏による), この写本全体の詳細な考察は他日を期したい。

- 6) CIHTS による校訂本 [MMT&Gu] に準拠して MMT 各章各偈 (各節) に対する註釈箇所的位置を示せば, (I), (II), (III) はそれぞれ MMT 第 1 章第 3 節～第 1 章第 5 偈に対する註釈箇所, MMT 第 1 章第 18 偈と第 1 章第 23 偈～第 2 章第 5 偈に対する註釈箇所, MMT 第 3 章第 7 偈～第 3 章第 18 偈に対する註釈箇所と同定できる。
- 7) ところで, R とククリパーダ (= ククリパ) は, マハーマーヤー系の著作の内容的近似性から同じ伝統を共有する同時代人と考えられているが ([大観 2005] p.453 (p.100)), ククリパは MMT の伝統中最重要人物であり ([寺本] p.383 [立川] p.48), 彼の著作の過半数が MMT 関連の文献である ([大観 2005] p.453 (p.100) [大観 2007] pp.76-75 (pp.87-88) 註 1)。ここにおいて, MMT をめぐるククリパ, R, A という三者の関係が注目されるわけであるけれども, この点の考察に関しては他日を期したい。
- 8) Gu の唯識思想は MMT 第 1 章第 10 偈～第 11 偈, 第 19 偈の註釈に集中的に述べられているが ([MMT&Gu] pp.7-10, pp.14-16), 第 10 偈の註釈は如来蔵思想を含み, 第 11 偈の註釈は「五智」に関する内容で「四智」の解釈のみが唯識説に関わり, 第 19 偈の註釈は認識論にも関わる。特に, 第 19 偈の註釈において, R が「大楽は言葉の虚構を離れた知と俱に生じる」([MMT&Gu] p.15) とする点は「大楽」解釈の一例として重要であり, MMT 第 1 章第 21 偈～第 22 偈, 第 2 章第 3 偈の註釈も密教の理論と実践に唯識思想を応用した例として興味深い ([MMT&Gu] pp.17-19, p.26)。
- 9) 関係代名詞 Skt.:yā;Tib.:gañ (注 10 参照) を受ける指示代名詞 Skt.:sā;Tib.:de を補う。
- 10) emendation, MS.:yā nisva <dha> bhāvatā (GST 本文の yo という読みは次の niḥsvabhāvataḥ (GST の本文では, 副詞 niḥsvabhāva-taḥ ではなく, 女性名詞 niḥsvabhāvatā の誤用で男性名詞 niḥsvabhāvata の主格単数として用いられている) という読みに影響された形であろう。なお, GST の読みに関して, [Matsunaga] が参照していない京大写本には yā niḥsvabhāvatā という異読があり, [Matsunaga] p.115 の脚注 16 によれば, 東大写本 435 番に niḥsvabhāvatā という読みがある。)
- 11) emendation, MS.: -ṇaṃ / (ブラケットの部分は Skt. 写本が欠損しているので, GST のテキストを参考にして復元した。)

〈キーワード〉 『マハーマーヤー・タントラ』 (= MMT), 『有功德』 (= Gu), 『大幻と名づける難語釈』 (= Pañ), ラトナーカラシャーンティ (= R), アランカーラシュリー (= A), 『秘密集会タントラ』 (= GST)

(高野山大学密教文化研究所受託研究員)